

アストロフィツムの育て方

Astrophytum

サボテン科 / Cactaceae

星を散りばめたような白い星点（有星類）。トゲなし〜鋭いトゲまで多彩な6種が揃い、実生育成も比較的容易なSEEDSTOCK人気筆頭のサボテン属です。

基本データ

🌱 成長期	夏型（春〜秋生育、冬は準休眠）
🌡 耐寒温度	最低5℃が目安（園芸情報）
☀ 日照	日なた（真夏は30〜50%遮光）
📅 播種適期	4〜8月（関東以南は5〜6月が安定）
🕒 発芽日数	3〜14日（最大3週間）
📍 主原産地	メキシコ（チワワ砂漠〜東部）、米国テキサス州南部（ <i>A. asterias</i> のみ）
📏 難易度	

概要・魅力

アストロフィツム（有星類）は、メキシコのチワワ砂漠を中心に自生するサボテン科の一属です。属名は「星（astron）＋植物（phyton）」のギリシャ語合成語で、その名の通り**白い星点（トリコーム）が球体を覆う、星を散りばめたような姿**が最大の魅力です。Kew POWOが受理する種数は6種で、日本では「有星類（ゆうせいいるい）」とも総称されます。

白い星点（トリコーム）は単なる飾りではありません。強烈な砂漠の日光を**反射・散乱させて球体温度の上昇を抑え、紫外線から内部組織を保護する機能**を持ちます。トリコームの多寡は種・品種によって大きく異なり、白点がほぼなく緑色の球体があらわになる「ヌードム（裸鸞鳳玉）」のような**変種**も存在します。こうした変異の多様さがコレクション性の高さにつながっています。

代表的な6種はそれぞれ個性が際立っています。

- **兜（*A. asterias*）**：トゲを持たず、均一な星点と丸みのある草姿が人気の最高峰。「スーパー兜」など改良品種も多数流通。IUCN危急種に指定される希少種でもある。
- **鸞鳳玉（*A. myriostigma*）**：通常5稜でトゲなし。育てやすく入門種としても親しまれる。変種・型が豊富。
- **般若（*A. ornatum*）**：高さ1mを超える大型種。稜に沿って長く湾曲した力強いトゲを持ち、ワイルドな印象。
- **瑞鳳玉（*A. capricorne*）**：灰白色の長い曲がりトゲが特徴的。比較的**耐寒性**が高めとされる。
- **コアウイレンセ（*A. coahuilense*）**：鸞鳳玉に酷似するが、より密なトリコームが特徴。POWOでは独立種として受理されているが、分類上の議論が続く。
- **カプト・メドゥサ（*A. caput-medusae*）**：タコの足のような長い結節が放射状に広がる、属内で最も異形の種。

アストロフィツムが選ばれる理由は多様です。実生（種まき）が比較的容易で発芽率も高く、芽が出る瞬間のよろこびを初心者でも味わいやすい。品種改良の対象として「スーパー兜」のような高付加価値品も多く、集める楽しみも尽きません。

少なくとも兜（*A. asterias*）と般若（*A. ornatum*）は、査読論文で**自家不和合性（自家不稔）**が確認されています。栽培環境で種を採りたい場合、同じ種の別個体（異なる遺伝子型）を2株以上揃え、開花時に人工授粉する必要があります。他の種も同様の可能性が高いと考えられています。

置き場所

アストロフィツムは**日当たりと風通しのよい場所**を好みます。光が足りないと球体が間延びして本来の丸みが崩れ、**病害虫**も出やすくなります。ただし日本の真夏は原生地よりも強い**直射**になりやすいため、季節に合わせた**遮光**が必要です。

春（3〜5月）

日当たりよく風通しのよい戸外か、室内の明るい場所に移します。寒の戻りに注意し、最低気温が10℃を下回る夜は室内に入れましょう。

夏（6〜9月）

生育期の本番ですが、日本の真夏は**30〜50%の遮光ネット**を使いながら管理します。通風の確保が重要で、**蒸れは根腐れ**や病気の直接原因になります。特に兜（*A. asterias*）は強光・高温蒸れに弱いため、遮光と風通しに気を配りましょう。自生地では

低木の陰に育つ種もあり、過剰な直射が球体焼けを起こすことがあります。

秋（10～11月）

気温が下がるにつれて水やりを減らし始めます。最低気温が10℃前後になったら室内取り込みの準備をします。

冬（11～3月）

準休眠期。室内の明るい窓辺（最低5℃以上を維持）で管理します。日照が不足しやすいので、可能な限り日当たりのよい場所を選び、1日4時間以上の日照を確保しましょう。サーキュレーターで空気を動かすと蒸れ予防になります。

耐寒温度は園芸情報では最低5℃が目安です。用土が完全に乾燥した状態であればより低温にも耐えるとの情報がありますが、これは種や個体によって差があります。湿った状態での低温は根腐れを招くため、冬の水やりは極力控えましょう。

○ 水やり

アストロフィツム栽培で最も多い失敗が水のやりすぎによる根腐れです。特に兜（A. asterias）は根が細く弱いため、過湿には十分な注意が必要です。「乾かしてからたっぷり」のメリハリを意識しましょう。

生育期（4～9月）

用土が完全に乾いたのを確認してから、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。土が乾いて2～3日後に与えるのが目安という栽培者も多くいます。少量をちょこちょこ与えるのではなく、しっかり乾かしてからたっぷり、を繰り返すことで根が丈夫に育ちます。

秋以降（10～11月）

気温の低下とともに徐々に水やりの頻度を落とします。

冬（11～3月）

断水気味に管理します。月1～2回ごく少量を与えるか、完全断水でも構いません。球体が著しくシワシワに萎れてきたときのみ少量与えます。低温＋過湿の組み合わせが根腐れ・赤腐れの最大リスクです。暖房で室内が乾燥している場合でも、水やりを急いで増やす必要はありません。

肥料

自生地は石灰岩質のやせた土壌のため、肥料は控えめが基本です。生育期に薄い液肥を月1～2回程度にとどめ、多肥は避けましょう。

水やりに迷ったら「もう1～2日待つ」くらいが安全です。サボテンは乾燥に強く、少し与えすぎよ

り少し足りないほうが根を傷めません。

🔧 用土・植替え

アストロフィツムには水はけのよい用土が必須です。自生地は石灰岩由来の砂質～粘土質の土で、栽培でも排水性を確保することが根腐れ予防の基本です。

用土の配合例

- 手軽な方法：市販のサボテン・多肉植物用培養土をそのまま使用。
- 自家配合（基本）：赤玉土（小粒）4＋軽石（小粒）3＋鹿沼土（小粒）3程度の無機質中心配合。
- 実生用：赤玉土（細粒）5＋バーミキュライト5など、根が張りやすい細粒配合。有機肥料・堆肥は実生では厳禁（カビ・病原菌の温床になる）。

乾きが悪いと感じたら軽石を増やし、逆に乾きすぎる環境では赤玉土を増やして調整します。鉢底には粒の大きい軽石を敷くと排水性がさらに向上します。

鉢の選び方

素焼き鉢や底穴のある通気性のよい鉢を選びましょう。受け皿に水をためたままにしないことが基本です。

植替えの時期と頻度

適期は4～6月（気温20℃以上の生育期入り口）です。真夏と冬は避けましょう。

- 兜（A. asterias）：根が弱く用土が劣化しやすいため年1回の植替えが推奨されます。
- 鸞鳳玉（A. myriostigma）：1～2年ごとに根詰まり解消を目的に植え替えます。
- 般若・瑞鳳玉など：2～3年ごとが一般的な目安です。

植替え時は古い土を落とし、痛んだ根を切り取ります。切り口を数日間陰干しして乾燥させてから新しい用土に植え付けます。植え付け後は数日～1週間ほど水を控え、遮光を強めて根の定着を待ちましょう。

🌱 発芽のさせ方

アストロフィツムは実生（種まき）が比較的容易で、適切な温度と湿度を管理できれば発芽率も高い属です。最大の敵はカビ（立ち枯れ）と過湿。清潔さと温度・湿度の管理が成功の鍵です。播種の適期は気温20℃以上が安定して確保できる4～8月（関東以南は5～6月が特に安定）です。

重要：採種するには複数株が必要です

少なくとも兜（A. asterias）と般若（A. ornatum）は査読論文で自家不和合性（自家不稔）が確認されており、他の種も同様とみられます。自分で種を採りたい場合は、同じ種の別個体を2株以上用意し、開花時に人工授粉することが必要です。

発芽までの手順

1. 用土を準備して殺菌する：赤玉土細粒とバーミキュライトを混ぜた、カビが生えにくい無機質中心の用土を容器に入れ、熱湯消毒または電子レンジ加熱で殺菌します。古土の使い回しは厳禁です。
2. 種子を前処理する：ベンレート水和剤（ペノミル）の1,000倍溶液に種子を24時間浸漬します。カビ・立ち枯れ（ダンピングオフ）予防が目的です。ぬるま湯（30℃前後）に2〜4時間浸けるだけの簡易法でも一定の効果があります。
3. 播種する（覆土はしない）：湿らせた用土の表面に種子が重ならないようにばらまきます。覆土はしないか、種子を軽く土に押しつける程度にとどめます。日本の実践では覆土なし＋高湿度保持が標準的な手順として広く行われています。
4. 高湿度と温度を保つ：透明な蓋やラップで容器を密閉し、発芽まで90〜100%近い湿度を保ちます。発芽適温は昼間25〜28℃、夜間18℃以上。20℃以上を安定確保することが最低条件です。温度が低い時期はヒーターマットが有効です。強い直射は避け、明るい半日陰に置きます。
5. 発芽を待つ：適温・適湿を維持できれば3〜14日で発芽が始まります。早いものは3〜5日で芽が出ますが、最大3週間まで様子を見ましょう。発芽率90%を超えるケースも珍しくありません。
6. カビ対策を続ける：数日おきにオーソサイド水和剤などの殺菌剤をスプレーします。カビが発生した種子は速やかに取り除きます。
7. 発芽後の管理（遮光・腰水）：発芽直後は直射日光を避け、50%遮光の半日陰で管理します。腰水（底面給水）を発芽後1〜2ヶ月は切らさないようにし、土の半分程度が乾いたら腰水を補充します。
8. 徐々に外気に慣らす：発芽が揃ってから2週間〜1ヶ月後を目安に、蓋やラップを少しずつ外して通気を確保します。一気に外すと乾燥で苗が傷むため、段階的に慣らします。3ヶ月以上経過したら上からの水やりに切り替えます。
9. 最初の植替え：発芽後1ヶ月を目安に、肥料分を含む用土へ最初の植替えを行います。小さな苗は丁寧に扱い、根を傷めないようにしましょう。

1年目の小さな苗は成株と異なり、冬も完全には断水させずに少量の水やりを継続し、可能な限り暖かく保つと丈夫に育ちます。最初の冬を乗り越えれば、その後の管理はぐっと楽になります。

病害虫・トラブル

アストロフィツムは管理が適切であれば比較的丈夫ですが、過湿・日照不足・蒸れから来るトラブルが大半を占めます。早めに気づいて対処することが、美しい球体を保つ近道です。

根腐れ（最重要）

水のやりすぎと通風不良が主な原因です。特に冬場の多湿が最大リスクです。特に兜（A. asterias）は根が細く弱いため、球体が柔らかくなったり変色したりしたら根腐れを疑います。対処は腐った部分を清潔なカッターで切り取り、切り口を数日乾燥させてから新しい無菌の用土に植え直します。重症の場合は回復が難しいため、予防が最善策です。

赤腐れ（茎腐れ）

根から侵入した糸状菌が球体に広がり、侵入部が赤茶色に変色します。発見が遅れると回復は困難です。患部を切除して断面を乾燥させるのが唯一の対処ですが、感染が広がっている場合は廃棄も検討します。過湿・通風不良の予防が何より大切です。

徒長（軟弱化）

日照不足・水分過多・肥料過多で球体が間延びし、本来の丸みが崩れます。いったん徒長した部分は元には戻りません。十分な日照（真夏は適度な遮光）と控えめな水やり、通風の確保で予防します。

カイガラムシ・ネジラムシ

- コナカイガラムシ：春先に稜や刺座に白い綿状の塊として発生します。爪楊枝・歯ブラシで物理除去するか、殺虫剤（オルトラン粒剤を用土に混ぜる）で対処します。
- ネコナカイガラムシ（ネジラムシ）：根に寄生し、放置すると株が枯死します。植替え時に根の状態を必ず確認しましょう。用土にオルトラン粒剤を混ぜて予防します。

ハダニ（アカダニ）

稜の溝など隠れた場所に寄生し、吸汁して株を弱らせます。一般の殺虫剤は効かないため、殺ダニ剤を使用します。定期的なシャワー洗浄（散水）が予防に有効です。

カビ病・頂部腐敗

生長点（頂部）に黒カビが付いて球体が柔らかくなる症例があります。伝染性があるため感染株は速やかに隔離・除去します。春〜夏にかけて用土周辺に発生する白カビ（糸状菌）は、古土や有機物の多い用土で起きやすいです。ベンレートなどの殺菌剤を定期散布して予防します。

アブラムシ

開花期前後に発生しやすいです。見つけたら市販の殺虫剤で早めに対処します。

多くのトラブルは「水のやりすぎ」「蒸れ・通風不良」「急な強光」が原因です。乾かし気味・風通しよく、を心がけると失敗がぐっと減ります。

栽培メモ



アストロフィツムの種子を探す
QRを読み取る / seedstock.jp